

令和3年度

京都府立綾部高等学校由良川キャンパス(東分校)

定時制課程

学校経営計画

(スクールマネジメントプラン)

実施段階

令和3年度 京都府立綾部高等学校(東分校定時制) 学校経営計画(スクールマネジメントプラン) (実施段階)

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
<ul style="list-style-type: none"> ・学力の向上と進路希望の実現 ・基本的な生活習慣の確立 ・基本的人権を尊重する態度と豊かな人間性の育成 ・健康及び体力の維持向上 ・地域社会から信頼される学校づくりの推進 	<p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆スマートスクール環境が整備され、各教科でICT機器を活用し、生徒に興味関心を喚起させる効果的な授業が徐々に展開できるようになってきた。 ◆コミュニケーション力に課題があり、中学校で学校に適応できなかった生徒についても、暖かい雰囲気の中、落ち着いて学校生活を送ることができた。 ◆伝統文化体験(華道)や講演会などの学校行事を充実させることにより、普段の授業でできないことを体験的に学習させることができた。 ◆両丹総体においては、卓球男子個人の部で2年連続優勝を果たした。また、生徒生活体験発表大会においては、本校で初となる最優秀賞に次ぐ、優秀賞第一席(京都市教育長賞)を受賞することができた。 <p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆集団生活において時として社会的な未熟さが顕在化する生徒が依然として少なくない。今後とも自己肯定感を高めさせたり、社会性を身につけさせる必要がある。そうした観点からホームルーム活動や特別活動を充実させる必要がある。 ◆特別な支援が必要な生徒に対して適切な指導ができるように、教職員研修を充実させ教職員一人ひとりの指導力や知識を向上させる必要がある。また、外部機関との連携をとりながら指導や支援にあたる必要がある。 ◆新型コロナウイルス感染拡大防止のために学校行事等の中止をするのではなく、内容や方法を検討しながら教育活動を進めていく必要がある。 	<p>■A・G・P(Ayabe Global Program)の推進</p> <p>〈スマートスクール〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICTを活用した授業 ・Slackの活用(ペーパーレス化・会議レス化) <p>〈探究活動〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・思考力・判断力・表現力の育成 ・SDGsを授業や学校行事へ <p>〈地域発信〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域でのボランティア活動 <p>〈連携事業〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・介護施設 ・保育園 <p>■3Q+4S+S(スマイル)の推進</p> <p>3Q</p> <ul style="list-style-type: none"> 〈Quality Teacher〉 教師としての資質向上 〈Quality School〉 教育内容の充実 〈Quality Students〉 未来を切り拓く人材の育成 <p>4S+S</p> <p>〈整理〉〈整頓〉〈清潔〉〈作法〉+〈スマイル〉</p> <p>整理整頓を心がけ、清潔な職場・学習環境を整える TPOに応じた言動を心がける 明るく元気に、笑顔がある学校</p>

分掌・教科	項目(重点目標)	具体的方策及び数値目標	評価	成果と課題
1 組織運営	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態に応じた教育を、効果的に実践できる体制を構築する。 ・業務のスマート化と教育内容の充実を図る。 	本校の教育課題に対応した教育実践をするため、分掌・学年・教科間の連携会議を毎月実施する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の職員連絡会や毎月の教育支援会議において、生徒に関する情報を共有し、共通認識をもって生徒の指導にあたることができた。 ・ICTを活用した授業展開はできているが、BYOD導入に向けての更なるスキルアップを目指さなければならない。 ・多くの教員が、働き方改革を意識して勤務時間内に業務を遂行することができた。
		生徒の実態把握やわかる授業を実践するために授業や会議の中でICTを効果的に活用する。	B B	
		会議の時間短縮や資料削減を図り、勤務時間の中で教材研究ができる時間を十分に確保する。	A	
2 教務部	<ul style="list-style-type: none"> ・授業改善に努め学力の向上を図る。 	校務システムを効果的に運用し、教務関係文書を正確に作成する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・校務システムと毎日行う連絡会によって、生徒の様子を把握することができた。 ・過年度追認が必要な生徒に対して、長期休暇の間に補習を行い、全員が進級、卒業することができた。
		教科担当・学級担任に教務関連の情報を確実に伝達し、意思の統一を図る。	B B	
		補習などを効果的に行い、生徒個々の学力を向上させることにより、全員を進級卒業させる。	B	
3 生徒指導部	<ul style="list-style-type: none"> ・安心安全な学校づくりを行う。 ・個々の発達段階に応じた指導を行う。 	問題事象に俊敏に対応し、各部・関連機関と連携し丁寧な指導を行う。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・安心安全な学校作りを目指し、各教員・各分掌と連携し情報共有・対応が行えた。 ・生活・学習上で不安定な要素を抱える生徒もいるので、今後も注意して見守っていきたい。
		問題事象の芽を摘む予防活動をいっそう推進し問題事象0を目指す。	B B	
		各関係機関と連携して交通安全教室、非行防止学習、法律講座などを適切に実施する。	B	
4 進路指導部	<ul style="list-style-type: none"> ・希望進路の実現に向けて、生徒の状況に応じた指導を行う。 	学年ごとに進路学習を計画、実施し、進路意識を高める指導を行う。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態に応じた進路学習の取り組みを実施した。 ・4年生には各生徒に対して丁寧な進路指導を行い、それぞれが希望する進路実現することができた。 ・LHRの時間を利用して、小説・随筆などの書き写しを行った。
		4年生には進路希望に応じた指導を丁寧に行い、希望進路の実現を目指す。	A A	
		書き写しの取組を通じて集中力を高め、丁寧な文字が書ける力を育む。	A	
5 保健部	<ul style="list-style-type: none"> ・心身ともに健康的な学校生活を送らせる。 ・自身の健康について興味を持たせる。 	生徒の健康診断の受診率を90%以上にする。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の健康診断の受診率はほぼ全員が受診させることができた。今後は要観察生徒の専門医への受診率を高める必要がある。 ・感染症対策のため、検温・健康観察の徹底ができ、校内での感染経路を絶つことができた。 ・「保健だより」の月1回発行ができ、生徒・保護者への健康安全啓発ができた。
		感染症対策のために、始業前の検温と健康観察を徹底する。	A A	
		「保健だより」を月1回発行する。	A	

分掌・教科	項目(重点目標)	具体的方策	評価	成果と課題
6 人権 教育部	・差別意識の解消に向けた学習を行い、生徒に人権意識を根付かせる。 ・奨学金制度の周知徹底を行い、進学や就職に際しての金銭的な不安の解消に役立てる。	人権意識を養うため、講演等の人権学習を年に2回実施する。	A	・7月に「就職差別」をテーマに、11月に「部落の歴史」をテーマにした人権学習を実施し、人権意識の高揚が図れた。 ・人権学習後の教員アンケートについては、口頭で意見交換会を実施できた。 ・奨学金の案内は各クラスに掲示するなど周知できた。また希望者については志望理由書づくり等の支援をすることができた。
		人権学習の充実に役立てるため、人権学習を行った際には教員へのアンケート調査を毎回行う。	B	
		各学年部と連携のもと、生徒への奨学金制度の周知徹底に努め、希望者には適切な支援を行う。	B	
7 第1 学年部	・基本的な生活習慣を確立させる。 ・生徒一人ひとりの様子を把握し、きめの細かい学習指導を行う。 ・家庭や学校での豊かな交流により社会性を身につけ、人間性を育成する。	自己を大切に、他者を認め合うクラス作りをすすめる。	B	・他者理解を中心とするクラスづくりに重点をおいて指導してきた。授業やHRの時間を利用して話し合いの機会をつくったので、相互理解をすすめることができた。 ・日々の健康・安全点検をし、生徒の健康被害・事故等の発生を未然に防げた。 ・定期的に個人面談・三者面談を実施し、生徒把握・保護者の意向把握をすることができた。
		毎日の健康状態を確認し、お互いが安全で安心した学校生活を送る。	B	
		定期的な面談を行い、生徒の状態を把握し、自立に向けた生活習慣・進路指導を適宜実施する。	A	
8 第2 学年部	・健全な生活習慣を確立させる。 ・生徒一人ひとりの様子を把握し、きめの細かい学習指導を行う。 ・家庭や学校での豊かな交流により社会性を身につけ、人間性を育成する。	毎日の健康状態を確認し、お互いが安全で安心した学校生活を送る。	A	・教科担当者と日ごろから情報共有を行い、生徒の実態把握に努めた。 ・保護者と頻りに連絡し、生徒の学校での様子や欠席日数を伝え、生徒の成長を見守った。
		定期的な面談を行い、生徒の状態を把握し、自立に向けた生活習慣・進路指導を適宜実施する。	B	
		教科担当等の教員と連携を密にとり、必要に応じて生活・学習支援を行う。	B	
9 第3 学年部	・生徒の学習状況、生活状況を把握し適切な指導を行う。 ・各々の生徒が将来に向けて展望が持てるようにきめ細やかな進路指導を行う。	教科担当等の教員と連携を密にとり、必要に応じて生活・学習支援を行う。	B	・教科担当者との連携を密に図り、彼らの現状をある程度知ることができた。 ・登校指導時の挨拶や日々の声かけを根気強く行った。 ・日常生活から進路実現に向けての大切さを語り込み、個々の生徒が自分と向き合う事の大切さを話した。
		生徒の現状把握のため、日常の挨拶を毎日行うなど積極的な交流を行う。	B	
		日常生活の振り返りを通じ、自己との対話を行わせ、主体的なキャリア形成を行えるよう指導する。	C	
10 第4 学年部	・生徒全員の卒業および希望進路の実現を目指す。 ・生徒一人ひとりの学習状況や生活状況を把握し、きめ細かな指導を行う。	生徒との個人面談を月に1回以上行い、進路指導に役立てる。	B	・生徒との面談を毎月実施したほか、普段から生徒と会話をすることに努めた。その結果、生徒の実態に関する情報をたくさん知ることができた。 ・職員間で密な連携を行い、集団として生徒の指導を行うことができた。 ・HRや総合的な学習の時間で、進路学習を行い、生徒の進路実現に役立てることができた。
		生徒との交流を積極的にいき、得られた情報を職員間で共有する。	B	
		HRや総合的な学習の時間を有効に活用し、生徒の希望進路実現の一助とする。	B	
11 国語科	・社会生活において必要な国語について、その特質を理解させ適切に使用できるよう指導する。 ・言語活動を通じて、生徒の思考力や想像力を育成する。	漢字や語彙について学習する時間を週に1回以上確保する。	B	・漢字について勉強する機会を確保することができた。今後も、よりよい教授方法を模索していく。 ・生徒が学んだことを振り返る時間を確保することができた。今後は、定期的な復習テストに取り組みたい。 ・ICTを学習の様々な場面で活用することができた。今後も、さらにICTの可能性を追求し、生徒の言語能力の向上を図る。
		毎回の授業で、生徒が学んだことを振り返ることができる時間を確保する。	B	
		ICTを教授道具としてはもちろんのこと、生徒の思考表現道具として活用できるような取組を行う。	B	
12 地歴 公民科	・地歴・公民の基本的な事項を理解し、知識として定着させる。 ・社会に出た時に必要な知識や能力、特に自分の意見や考えを持ち、それを相手にわかりやすく伝える能力を身につけさせる。	生徒の実情に応じた教材を精選する。	B	・プリント中心の授業を展開した。またパワーポイントを利用して数多くの視覚教材を用意し、生徒の興味関心を引き出すことを重視した。 ・テスト前には復習プリントを用意して、知識の定着と授業の振り返りを行った。
		パワーポイントを利用した教材と授業プリントを用意し、授業への関心を高め、知識の定着を図る。	A	
		リアルタイムのニュースを教材化し、社会への関心を持たせる。	B	
13 数学科	・数学の基礎的・基本的な知識技能を習得させる。 ・数学における様々な問題に対し、数学的な思考・判断・表現ができる。	プリントを用いて基本的な学力を習得させる。	B	・毎回の授業で、プリントの空欄を埋めるように指導した。 ・授業の最初に計算テストを実施し、基本的な計算能力を身につかせた。 ・問題を解く際は、生徒に積極的に発言を求めた。 ・課題として、問題を考える時間や演習の時間に何をやるかの指示を明確化する必要があった。
		学力の定着を図るために、定期的に学力テストをする。	B	
		授業中に問題を解説する場合は、できるだけ生徒に発言を求め、考える時間を作る。	B	
14 理科	・身近な事柄から理科に対する興味を持たせ、社会生活に必要な科学的知識・能力を身につけさせる。	理科に興味を持たせるため、演示実験や持ち込み教材・ICTを活用する。	B	・日々の授業では、生徒実態に合わせた補助教材プリントを活用し、学力定着に務めることができた。 ・社会人講師や新聞記事の活用をすすめ、日常生活と学習内容を結び付け、理解を広げることができた。
		自然や日常的な事柄と学習内容を関連させるため、社会人講師の登壇や新聞等を利用する。	A	
		理科における計算・知識を定着させるために、教科書以外に補助教材として、プリントを使用する。	A	

分掌・教科	項目(重点目標)	具体的方策	評価	成果と課題
15 保健体育科	・保健、体育の授業を通して、生徒が心身ともに健康的に日々の生活を過ごすことができるための授業を展開する。また、生涯スポーツの観点から、多くの項目を通して卒業後もスポーツに積極的に触れ合う姿勢を育成する。	授業始めに体育館ランニング2往復と体操、ストレッチ(柔軟体操含む)を行う。	B	・全学年において授業始め毎時間2週のランニングを行うことができた。 ・全ての種目でプリントを作成し、筆記試験を行うことで競技のルール等を覚えさせることができた。 ・全学年において数多くの多様な種目に触れさせることができた。
		それぞれのスポーツへの知識や理解、興味を育成するため、全ての種目でプリントの資料を作成し、確認テスト、及び実技テストもおこなう。	B	
		多くのスポーツに触れ合う機会を持たせるため、1年間で7種目以上の生涯スポーツを行う。	B	
16 英語科	・生活を送る中に 英語が溢れている。知らないうちに、発音や意味を知っていることも多いので、英語は身近なものであることを知り、学ぶ意欲を育てていく。	ICT教材を使って、生徒に関心を持たせ、理解を深める授業を行う。	B	・ICTを使って授業を行うことができた。 ・フレーズや文法を使って、自分のことについて、短い文を作成させ、主体的に取り組む姿勢を育成した。 ・プリントの問題を解き、単語テストを行うことで、理解を深めることができた。
		生徒に授業内容を整理させ、理解を深めさせるため、毎時間ノートを回収し点検する。	B	
		生徒に知識を定着させるため、全学年、毎時間、授業中に単語テストを実施する。	B	
17 芸術科	・基礎技術を充実させ、自ら表現する意欲を育てる。	授業規律を大切にす。	B	・2年生は全員意欲的に取り組むことができたが、3年生は意欲に個人差があり、意欲がない生徒に対する指導については十分な成果が得られなかった。 ・集中して取り組んだ生徒の作品の中には、完成度の高いものが見られた。
		授業時間を有効に活用し、完成度を高める姿勢を身につけさせる。	B	
		基礎から高度な内容まで表現できる幅を広げさせるため、技術差のある生徒が取り組める課題を取り入れる。	B	
18 家庭科	・自立する力を育成する。	身近な事柄を教材として選び、生徒の興味・関心を引き出すよう工夫する。	B	・身近な問題を取り上げることで、生徒の意識を高めることができた。 ・実習など体験的な学習に積極的に取り組ませることができた。
		体験的な学習課題を多く設定する。	B	
19 情報科	・現代社会における必須アイテムであるパーソナルコンピュータの操作に習熟させる。	タッチタイピングの練習に力を入れ、文書作成ソフトによる反復練習を行う。	B	・情報モラル・セキュリティ教育を体系的に行うことが出来た。 ・生徒が安全に、かつ有効に情報機器を日常的に使うことができるように今後も繰り返し指導していく必要がある。
		文書入力量を重視して評価し、欠席しないで取り組む生徒を評価する。	B	

学校運営協議会による評価	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信をしているが、それを受け手に見てもらう工夫が必要である。 ・コロナの影響で部活動をはじめ様々な教育活動に制限がかかり、ストレスをため込んでいる生徒もいるので、生徒の心のサインをしっかり見る必要がある。 ・探究活動における大学との連携の取組を通じて生徒は自信を深め、成長にもつながっているため、今後も生徒にはいろいろな体験の機会を与えることが大事である。 ・地域の課題解決を教材として、地域に根ざした教育活動を展開していくことも大事である。 ・ICT教育を充実させるための教員研修もできており、タブレットを活用した授業展開がしっかりとできています。 ・クリーン作戦や外部講師の授業を通じて、SDGsを実践し、発信することができている。 ・中学校で不登校であった生徒が、定時制の中で自分の居場所を見つけ、希望進路実現を果たすことができています。
--------------	---

次年度に向けた改善の方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・BYOD1年目において、タブレットを活用した効果的な授業展開ができるように、教員研修を充実させてスキルアップを図っていく。 ・地域や外部との連携をさらに強め、体験活動を取り入れた教育活動を展開していく。 ・学校行事などの取組の様子については、新聞掲載などを通じて広報はできているが、中学校に対して教育活動を理解してもらうための工夫を検討していく。 ・今年度は外部講師の授業や体験活動を取り入れた授業を実践し、生徒の学習意欲を引き出すことができたので、次年度も外部講師や体験活動を取り入れた教育活動をさらにすすめていく。 ・次年度も特別な支援を必要とする生徒が入学してくるので、適切な指導をすすめられるように教職員研修を充実させていく。また、教職員が一丸となって指導にあたるようにするため、必要な情報を共有し、共通理解をした上で教育活動に取り組んでいく。
---------------	---